

秋山良照著

中国土地改革体験記



中公新書

468



中公新書 468

秋山良照著
中国土地改革体験記

中央公論社刊

秋山良照（あきやま・よしてる）

1919年（大正8年），山梨県に生まれる。
旧制尋常高等小学校卒。中国でマルクス・
レーニン学院，北京大学に学ぶ。
現在，図書編集に携わる。

著書『反戦兵士物語』（共著）
『父親が語る太平洋戦争』（共著）

中国土地改革体験記

中公新書 468

© 1977年

検印廃止

昭和52年 5 月15日印刷

昭和52年 5 月25日発行

著 者 秋 山 良 照

発行者 高 梨 茂

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-1
振替東京 2-34 電話(561)5921代

はじめに

私は、昭和一五年から三三年までの一九年間を、断続的ではあるが中国の兵士と農民のなかですごした。年齢でかざえると二一歳から四〇歳までの青年期、壮年期を中国ですごしたことになる。

この間、抗日戦争、国内戦争、中華人民共和国の成立、社会主義中国の建設へと歴史は進展した。それは、世界史に銘記すべき進展であった。私はこの偉大な歴史的進展の時期をあるときは中国の一兵士として、あるときは中国政府の客員として体験してきた。

私は、この得難い体験を身につけるために、克明な日記をつけてきたし、また、体験に関連する資料、政府の指示、公刊文献、新聞の切り抜き、チラシ、壁新聞のうつしがきなどを収集してきた。しかし、昭和三三年、帰国に際し多くの資料をうしなった。いま手もとにある資料は、抗日戦争時期のものは私自身もち帰ったものと、鹿地亘氏と森健氏からいただいたものである。中華人民共和国建設期の資料、土地改革日記、社会主義教育運動、整風日記と関連資料は、私がいち帰ったものと、中国旅行者にたのみ、中国政府から返してもらったものである。

中国は、わが国とは二千年来のつきあいのある隣国である。わが国は中国から多くのものを学

び、吸収し、栄養にしてきた。中国は悠久な歴史と文化をもつ国である。中国は広大な国土と、資源と、人口をもつ国である。中国は、多くの、すぐれた指導者と、すばらしい働きてをもつ国である。しかし、ついこの間までの中国は、諸外国への屈辱と、それにたいする抵抗の日々であった。一八四〇年の中英アヘン戦争から、一九一九年の「五・四」運動までの中国近代史は、半植民地、半封建の中国の歴史であった。一九一九年からじまる中国現代史は、おくれた中国を近代的国家にたてなおす、新民主主義革命の闘いの日々だった。

一九一二年、中華民国が成立し、一九四九年には中華人民共和国が成立した。しかし、それは、近代化への門がひらかれたにすぎない。おくれた農業国から、近代工業をもつ国家を建設するには先進国においつき、おいこさなければならぬ。中国人民の闘いはこの日から新たな一歩がはじまったといえよう。

闘いの当面する課題は土地改革であった。私は、この歴史的課題に、土地改革工作員として参加できた。土地改革のあと、農民の土地所有が実現したが、生産性のひくい個人農業では、社会主義工業化に貢献することはできない。一九五五年、毛沢東は「農業集団化について」という論文を発表した。中国は、その後、一戸単位の農業から、八、九戸単位の互助組、二〇、三〇戸単位の初級合作社、一七〇戸単位の高級合作社、五〇〇〇戸単位の人民公社へと農業集団化へのあゆみをすすめている。土地も、生産手段も、集団所有の方向にすすみ、粗放経営から集約経営へ

と歩をすすめてきたが、それは平坦な道ではなかった。

広東での土地改革がおわってから五年目の春、私は、四川省でふたたび農村にはいり、土地改革後の農村を見聞することになった。四川での工作は農村の整風と社会主義教育運動であった。

私は、本書をかくにあたって、私の見聞のみを記し、憶測や推論をさけた。日記、チラシ、新聞の切り抜きなどの直接の資料を整理し、記述した。私にしてみれば、私と中国革命の一時期的にかかわりあいをおして、個人的ではあれ、一つの歴史的視点で中国問題を見てきたつもりである。しかし、見聞のせまさ、不足はまぬかれない。ご叱正を願うものである。

目次

はじめに

八路軍との日々

捕虜になる　思い出の人々　若き日の指導者たち　延安の二年間　終戦後の活動

土地改革に参加する

「南下工作団」の一員として　新田埔村へ
村の実状把握　訪貧問苦の工作　雇農・
丘子勤の歩み　人民裁判はじまる　即時
銃殺　根をおろし、根をはる　「串連」
と「大衆観点」　丘巨昌の女奴隷　選挙
の方式　没収したものの分配

ふたたび農村工作隊員として

趙紫陽の話　農民をどう動員するか　初

整風運動の中へ

期の土地改革　仙洞郷へ　土地の分配Ⅱ
地主階級の消滅　工作団の総括　指導者
によるまとめ　黒幕を銃殺する　リーダー
の性格　総括の準備　北京にもどる

林一良の名前で　巴県長・周平の報告

「光打雷、不下雨」　整風運動の四段階

馬榮欽の自己批判　両河村で　第一段階

——実態調査　第二段階——大鳴大放

半山村で　団結——批判——団結　改善一五

○項目　愚公、山を移す

資　料　167

あとがき　179

中国土地改革体验記

八路軍との日々

捕虜になる

一九三七年（昭和一二）七月七日、日中戦争が勃発した。二年後の四月、私は徴兵検査を受けて甲種合格。入営までの期間、東京・大田区にあった大牟田鉄工所で、飛行機のエンジンの羽根をつくる仕事にかり出された。

私は、一九三九年（昭和一四）十二月、甲府四九連隊に入隊した。その月に甲府を出発、神戸港から中国の塘沽港（タング）につき、天津で北支派遣軍伊集院部隊（第三師団歩兵第二一〇連隊第一大隊第二中隊第一小隊）に配属になり、山東省堂邑県（とういうけん）の警備隊勤務となった。初年兵の訓練期間の三月は堂邑県で過ごし、そのあと師団司令部のある兗州（えんしゅう）に派遣され、木村通信隊で暗号教育を受けた。このころ、兗州を基地に泰山地区で、なん回かの「討伐行」に参加した。戦争は、人を鬼にする。敵兵を捕え、初年兵の肝だめしと称し、銃剣で刺殺する。村に火をつけ焼きはらう、まさに地獄図であった。通信隊の教育が終って堂邑に帰った。一九四〇年（昭和一五）九月七日の夜明けの三時ごろ、敵情ありとのことで非常召集を受け、私は二中隊の軽機関銃の二番手として、県の東北にある鄭家屯（ていかとん）に向った。

この日が私の運命を変える日となった。砂地の波状の丘陵にある梨畑に囲まれた鄭家屯に着いたとき、村はひとつ子一人いない無人の郷であった。無気味なほどの静かさであった。村はずれ

に出たとたん、すさまじい銃声が上がった。それから夕方の六時近くまで激しい銃撃戦が続いた。軽機関銃の射手が倒れ、二番手（弾運び）の私は射手になり、夢中で戦っていた。村はずれの廟にこもって戦う私たちに迫撃砲弾が集中した。廟の屋根はふきとばされ、その下敷きになった。ふと気がつくとき軽機関銃の銃把がぬるぬるする。みると、まっ赤に血ぬられている。左の小指に激痛がはしった。ほとんど同時に、頭をなぐられたような感じがした。汗が流れてくる。右手でぬぐうと、汗ではなく、まっ赤な血だった。私はそのまま意識を失った。

気がついたときは八路軍の捕虜になっていた。八路軍は、鄧小平・劉伯承麾下の一二九師冀南軍区新編七旅団二〇団であった。冀南軍区の司令官は陳再道、政治委員は宗任窮、主任は劉志堅であった。日本軍八〇名にたいし、八路軍の数は二〇〇〇余であった。まったく無茶な「討伐行」であった。

捕虜となった私は、当時日本軍でいわれていた「捕虜は耳に針金をとおされ、目をくり抜かれ、木にぶらさげられ、虐殺される」という流言を信じていた。日本軍が八路軍の捕虜を初年兵の肝だめしにし虐殺した現場を見てきた私は、やられてもしかたがないと思っていた。私は、殺されるまえに逃亡するか自殺するかを真剣に考えていた。

八路軍の中に、北海道大学出身の譚林夫という青年がいた。年のころ二五歳ぐらいか、ひたいのひろい目玉の大きな青年だった。偶然にも、彼の身元引受人は、私の家近くの東京西大久保の

佐藤氏だった。父は張作霖の財務部長をしていたという。日本語が話せるものはほかにも旅順工大出身の張茂林という部長、台湾出身の張光熙などがいた。とくに譚林夫は私につきそって話相手になり、身のまわりの世話をしてくれた。

捕虜になった当時の私は、軍国主義教育で育った平凡な一兵士にすぎなかった。

私の思想にある変化をよび起したのは、皮肉ない方だが、日本軍の中国人民にたいする残酷な仕打ちだった。捕虜になってまもなく、河北省南宮県の近郊で、日本軍に焼きはらわれた村を通りかかった。老人、婦人、幼児まで虐殺され、丸焼けにされていたし、血みどろの母にいだかれ、生命をとりとめた赤子の泣き声が耳にいたかった。

私は、捕虜として中国人の側からこの戦争のひとつまを目撃した。これが「八紘一字」か、これが「聖戦」か。私は、日本軍に向って訴えたかった。女、子どもを殺すな、日本人として誇りある「武士道精神」を失うな。私の知性、判断力は、なんのことはない、当時の日本の軍国主義教育の枠内の思考であったが、それが反戦への糸口につながっていた。

そのころ、「駒は朔風にいななき、人は家郷をおもう」という名文句ではじまる、日本軍に帰隊せよという手紙が、麦倉兵団から中国農民をつかってとどけられた。その手紙は、「国をあげて『聖戦』にとりくんでいる、郷党家族の名を汚すな、心をいれかえて帰ってこい、君たちは忠勇な陛下の兵士として戦い、力つき刀おれ、武運つたなく敵の捕虜となったものである。しかし、

敵に利用され、国にそむき、名を汚している、一日も早く帰隊せよ」という要旨のものであった。末尾に麦倉兵団長の署名があり、帰ってきたら私が責任をもってわるいようにはしないとあった。私の人生観、世界観がかわっていくには、ここで提起されている問題、祖国、天皇、「聖戦」、郷党、家族、名誉などの問題を一つ一つ解決しなければならぬ。しかし、私はこのような問題を解決してから反戦活動にはいったのではなかった。

八路軍の親切な待遇にたいしては、つねに利用されるのではないかと疑心暗鬼で警戒し、反発した。譚林夫、張茂林、張光熙らから、レーニンの国家論、史的唯物論、社会発展史、戦争論、共産党宣言など多くのことを学んだが、それらすべてをすなおにうけいれたわけでもなかった。

はじめは、中国の人びとのおおらかな、誠実な、あたたかい人間性にひきつけられ、中国人を信頼しはじめたことから始まる。その後、生活のなかから、時間を経て、中国共産党の指導と政策が広範な大衆を組織し、強大な抗日救国戦線をつくりあげていくさまを、具体的な日常生活のひとつこまひとつまで身につまされて教えられ、ふかく考えさせられるようになった。

中国人の中の日本人として、焼き、奪い、殺す日本軍の行動に恥じ、いかりを感じたことと、八路軍の将士と農民たちの日々の生活と行動、それをみちびく中国共産党員思想と行動、それらが私の心をゆさぶり、反戦へかりたてたのだった。

思い出の人々

私は、自分の歩んだ道程のなかに、いくつか思い出を挿入し、私の思想をかえてくれた人びとを語りたい。

八路軍敵工部幹事、職叔敏は死んだ。私は、この将校とは半年余りを一緒にすごした。職叔敏と私は一九四一年の八月の戦闘で、岡村寧次指揮下の日本の混成八旅団に包囲され、追いつめられていた。そんなある日、高粱畑で休んでいたとき、ふと見るとすぐ近くにスイカ畑があった。私はのがかわいていたのと戦闘のつかれもあって、スイカにとびついた。ところが職叔敏は、スイカに手を出してはいけない、という。しばらく待て、と私をとどめて、スイカの持主の百姓をさがしに行った。百姓が来て、私たちがスイカに手をつけないのを見て非常に怒った。なぜ早くスイカをたべないか、という。われわれのスイカはあなたがたのものだ、あなたがたがいなかったらこのスイカはすでに略奪されていただろう、だからあなたがたが遠慮することはない、というのだった。しかし職叔敏は、八路軍の軍規を守って、農民のものに手をつけてはいけない、といったのだった。

八路軍の軍規とは、三大紀律八項注意のことである。三大紀律とは、一切の行動は指揮に従う、大衆のものは針一本、糸一筋もとらない、すべての捕獲品は公けのものとす。八項注意とは、言葉づかいはおだやかに、売り買いは公正に、借りたものは返す、こわしたものは弁償する、人

をなぐったり罵ったりせず、農作物をあらさず、婦人をからかわず、捕虜をいじめない、というものであった。

私はかつて日本軍にいたときに、日本軍は、家畜であろうと農作物であろうと手あたり次第にとつてたばたことを見ている。侵略者と抗戦者とのちがいを目のあたりにみるおもいであった。農民と八路軍とのこの結びつきが、農民に支えられた無敵の軍隊をつくっているのだということをも身をもって知った。

一九四二年（昭和一七）四月二十九日の朝、八路軍は、日本軍の急襲を受けた。その夜、そうきよう東強県近くの大屯鎮で封鎖網をこえようとして、日本軍に銃撃され、職叔敏は腹に三発の銃弾をあびて倒れた。私がかけたときには彼はすでに意識が朦朧としていた。それでも私が「職叔敏」と呼びかけると、手をさし出して固くにぎったまま息がたえた。職叔敏の死に、見守っていた中国の兵士、農民は一斉に声をあげて泣いた。私も泣いた。

そのころ私を指導していたのは、いま中国の科学技術院にいる、旅順工大出身の張有萱ちやうゆうせん（當時は、張茂林と名のついていた）であった。張有萱はまだ軍国主義の名残りの濃い私にたいして、「あなたはザクロの味を知っているか」といった。私はやぶからぼうのこの質問にとまどつて、ザクロはすっぱいんだと答えた。